

財界人・文化人の「師弟関係」

—『私の履歴書』の分析から—

稲垣 恭子 ・ 濱 貴子

はじめに

『私の履歴書』は、各界の著名人が自身の過去から現在までを回顧的に綴った自伝的読み物としてよく知られている。1956（昭和31）年に日経新聞のコーナーとしてスタートしてから現在まで、750名を超える人物が執筆者として登場している。そのプロフィールをみると、世代的には1860年代生まれから1950年代生まれまで、会社経営者を中心に、芸術・芸能関係、知識人や文筆家、政治家まで、財界、学界、文学界、政界など各界で活躍してきた著名人が含まれている。

各人物がそれぞれほぼ一カ月にわたって記述している内容には、出生地や幼少時の家族関係、学校生活、軍隊経験、結婚生活、就職や職業にまつわるさまざまな経験やエピソードが含まれている。『私の履歴書』の魅力は、各界を代表する著名人の個性的でダイナミックな生きかたや交友関係などについて、それぞれの時代の社会的背景と同時に具体的に知ることができる点にある。戦前・戦後を通じて各界を支えてきたエリートの自己形成とキャリア形成の過程を垣間見ることができる資料としてもひじょうに興味深い。そのなかで紹介されているエピソードは、さまざまな形で引用されることも多い。

部分的な引用以外で『私の履歴書』を扱った研究としては、主に「経済人編」に登場する会社経営者（財界人）に焦点をあててそのキャリアを量的に分析したものがいくつかある¹。これらの研究では、主に学歴や出自などの属性と進学動機や経営者タイプ（パターン）の関係の分析に焦点があてられている。その他にも、進学動機やアスピレーション形成、読書や学校生活といったより質的な側面から学歴エリートの教育経験の分析を試みた研究もある²。これらは、近代日本の学歴エリートの教育とキャリア形成という視点から『私の履歴書』を分析した数少ない先行研究である。ただこれらの研究では、ある程度まとまったデータが扱われているものの、分析視点や方法が限定されており、必ずしもその内容に踏み込んだ詳細な分析・検討が行なわれているわけではない。

『私の履歴書』のなかには、学校や習い事、職場などで出会った「先生（師）」についての思い出やエピソードも数多く登場する。自伝や回想録のなかで、人生におけるさまざまな経験の内のどこを強調して語るかには、著者の価値観や美意識と同時に、その時代の社会的背景が映し出される。『私の履歴書』のなかで「先生」がどのように語られ、それが時代とともにどのように変化していくのかをみていくことは、日本における「先生（師）」という存在の社会的位置や意味とその変化を知る上でも重要な手がかりとなる。本稿では、『私の履歴書』における「先

生」の思い出に焦点をあてて、その特徴や変化について、主として量的な分析を軸として考察していきたい³。

本研究は、財界人・文化人にとっての「先生」の意味や位置づけとその変化を検討することによって、戦後日本における各界リーダーの自己形成の特徴と界の構造を明らかにするための基礎的な研究である。

1. 分析の対象と方法

データの概要

本稿で分析の対象としたのは、連載が開始された1956年から2008年の間に『私の履歴書』に掲載された日本人男性561名の自伝である⁴。資料には、日本経済新聞社編『私の履歴書 経済人』(1-38巻)、日本経済新聞社編『私の履歴書 文化人』(1-20巻)、日本経済新聞縮刷版(1982-2008年)を主に用い、さらにそこからもれたケースについては日経ビジネス人文庫『私の履歴書』シリーズ各巻を用いて補足した。

表 1-1 データの概要

掲載時年齢	N	%	本人職業	N	%	高等教育：大学	N	%
90代	12	2.1	会社経営者	252	44.9	東大	164	38.5
80代	108	19.3	芸術・芸能	134	23.9	京大	37	8.7
70代	280	49.9	専門職	68	12.1	他帝大	24	5.6
60代	144	25.7	文筆	61	10.9	官公立専門学校	90	21.1
50代	17	3.0	政治家	30	5.3	早稲田	29	6.8
計	561	100.0	官僚	16	2.9	慶応	41	9.6
出生年	N	%	計	561	100.0	他私大	41	9.6
1861-70	3	0.5	出身階層	N	%	計	426	100.0
1871-90	90	16.0	上	90	16.4	高等教育以外	131	
1891-1910	232	41.4	中の上	303	55.2	欠損値	4	
1911-30	191	34.0	中の下	131	23.9	高等教育：学部	N	%
1931-50	45	8.0	下	25	4.6	文	60	14.6
計	561	100.0	計	549	100.0	法	105	25.6
掲載時期	N	%	欠損値	12		経済	116	28.3
1956-1975	227	40.5	最終学歴	N	%	医	20	4.9
1976-1995	204	36.4	高等教育	426	76.5	理	19	4.6
1996-2008	130	23.2	中等教育	63	11.3	工	50	12.2
計	561	100.0	初等教育	68	12.2	農	11	2.7
出身地	N	%	計	557	100.0	芸術	29	7.1
東京	153	27.3	欠損値	4		計	410	100.0
地方大都市部	71	12.7	出身階層	N	%	分類不能	16	
地方市部	124	22.1	上	90	16.4	高等教育以外	131	
地方郡部	213	38.0	中の上	303	55.2	欠損値	4	
計	561	100.0	中の下	131	23.9			
			下	25	4.6			

表 1-2 出生年と掲載時期の関係

出生年	掲載時期							
	1956-1975		1976-1995		1996-2008		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
1861-70	3	100.0					3	100.0
1871-90	87	96.7	3	3.3			90	100.0
1891-1910	134	57.8	94	40.5	4	1.7	232	100.0
1911-30	3	1.6	105	55.0	83	43.5	191	100.0
1931-50			2	4.4	43	95.6	45	100.0
計	227	40.5	204	36.4	130	23.2	561	100.0

データの概要は、表1-1の通りである。掲載時年齢、出生年（20年ごとのコーホート）、掲載時期（20年ごと）、出身地、職業（本人）、出身階層、最終学歴、によってそれぞれ分類している。出生年は、1870年代から1930年代生まれを中心に1860年代生まれから1940年生まれまで含まれている。職業では会社経営者が約45パーセントを占めていることと、高等教育卒が76.5パーセントと高学歴であることが特徴である。

表1-2は、出生年と掲載時期とのクロス表である。ここから、出生年と掲載時期とがほぼ対応していることがわかる⁵。

分析の方法と手順

思い出の分析には、各著者の①自伝に占める「先生」の思い出の記述量、②自伝に登場する先生数、③「先生」一人当たりの思い出の記述量、の三つの指標を用いた⁶。各指標の算出の具体的な手順は以下の通りである。

①思い出の記述量は、各「先生」についての思い出の該当箇所の行数を特定し、それを自伝全体の行数で割った値（％）とする⁷。②自伝に登場する先生数は、自伝のなかで著者が「先生」、「師」として記述している人物の人数である。その際、「先生」の質の違いを分析に反映させるために、「学校の先生」と「学校外の先生」に分類した⁸。③「先生」一人当たりの思い出の記述量は、①を②で割った値である。

①～③を用いて、職業や学歴等の属性との関連を軸に分析を行なった。なお、『私の履歴書』における「先生」の思い出は、記述される時点からふり返った回顧データであり、実態を反映していると同時に、語られる時点での個人的な状況や社会的規範を反映した思い出の再構成である。分析と考察に際しては、こうした回顧データの特徴にできるだけ配慮した。

2. 「先生」の思い出の全般的傾向

まず、「先生（師）」の思い出の記述の全体的な特徴と傾向について概観しておこう。表2は、著者の思い出記述全体のなかで、「先生」について記述しているかどうかを示したものである。

「学校の先生」・「学校以外の先生」のいずれかについてその思い出を記述している著者の割合は全体で94.5パーセントと高く、自己の軌跡を語る上で「先生（師）」の存在が欠かせないものであったことがわかる。

なかでも、「学校の先生」については84%の人が何らかの形で触れており、「先生」といえば「学校の先生」という意識が強かったことがうかがえる。しかしそれだけでなく、半数以上の著者は「学校以外の先生」、すなわち職場の上司や宗教家、作家（著書）等を通して出会った人物を「心の師」「人生の師」として挙げている。さまざまな人間関係のなかで、「師」とする人物との

表2 「先生」の思い出の記述の有無

		記述あり	記述なし	計
学校	N	471	90	561
	%	84.0	16.0	100.0
学校外	N	293	268	561
	%	52.2	47.8	100.0
全体	N	530	31	561
	%	94.5	5.5	100.0

表3 「先生」の思い出の全体的傾向

		種類別内訳		全体	N
		学校	学校外		
思い出（％）	値	3.1	2.7	5.8	561
	%	52.9	47.1	100.0	
先生数（人）	値	5.1	1.7	6.8	561
	%	75.1	24.9	100.0	
思い出/先生数（％）	値	0.7	2.0	1.1	—
	N	471	293	530	

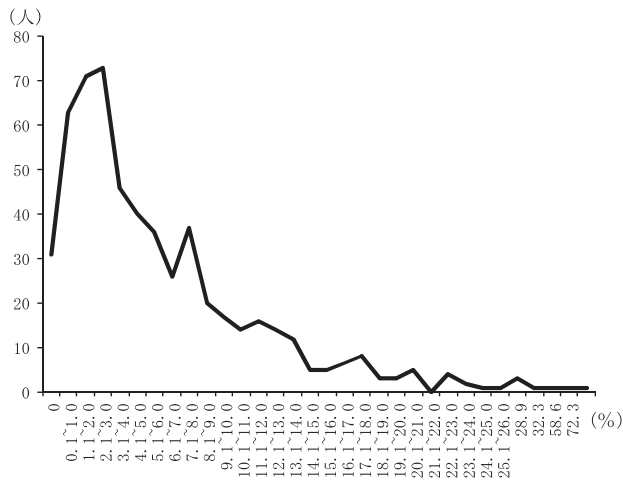


図1 「先生」の思い出の記述量の分散（個人差）

『私の履歴書』では、出生から現在までの軌跡を時系列にそって語っていくスタイルをとっていることが多く、記述量の配分やパターンはだいたい同じようなものかと思えるかもしれない。しかし実際には、それぞれの記述の厚みや語りかたはかなり多様である。

図1からわかるように、記述全体の70パーセント以上を「先生（師）」の思い出やそのエピソードにあてている人がいる一方で、「先生」なるものについてまったく触れていない人もいる。ちなみに、紙面全体の20パーセント以上を「先生」の思い出に費やしている人が16人、逆に「先生」についてまったく言及していない人は31人である。また、登場する先生の人数も、1人から40人とその幅は大きい。そうした違いについては、次節で詳細に分析することとして、まず全体的な傾向について述べておきたい。

人生全体の思い出の記述のなかで「先生」の思い出に費やされているのは、平均して5.8パーセントほどである（表3）。著者一人が担当している全体の分量は原稿用紙で換算するとほぼ105枚分になる。したがって、5.8パーセントという約5枚半である。その内訳をみると、「学校の先生」が52.9パーセント、「学校外の先生」が47.1パーセントとなっており、「学校の先生」の思い出が半分以上を占めている。また、登場する先生の人数をみても、全体で約7人、その内5人は「学校の先生」になっている。

表4 各学校段階の「先生」の思い出（最終学歴別）

学歴	学校段階				計	N	
	就学前	初等教育	中等教育	高等教育			
思い出 (%)	高等教育	0.02	0.50	0.83	<u>2.49</u>	3.84	426
	中等教育	0.01	<u>0.59</u>	<u>0.51</u>	0.00	1.11	63
	初等教育	0.04	<u>0.36</u>	0.00	0.00	0.40	68
	計	0.02	0.49	0.70	1.91	3.11	557
先生数 (人)	高等教育	0.06	0.90	1.40	<u>4.01</u>	6.37	426
	中等教育	0.02	0.86	<u>0.89</u>	0.00	1.76	63
	初等教育	0.01	<u>0.65</u>	0.00	0.00	0.66	68
	計	0.05	0.86	1.17	3.07	5.15	557

では、「学校の先生」の思い出のなかでは、どの学校段階の教師が一番多く登場するのだろうか。表4は、各学校段階（初等、中等、高等教育）の教師の思い出がどのくらいの割合を占めているのかを、本人の最終学歴別に示したものである。

これをみると、小学校卒の著者の思い出が小学校時代の教師であることは当然として、中等教育（旧制中学校や新制高等学校等）卒では初等段階と中等段階の教師が半々、高等教育卒のになると旧制高校や大学時代の教師の思い出の占める割合が高くなっている。挙げられている先生数をみても、それぞれの学歴の最終段階の教師が最も多くなっている。学校の世界から社会人へと移行するときに出会った学校時代の「先生」は、思い出として記憶に残りやすいことがうかがえる。その語りかたには、現在（掲載時）の職業生活とは異なる懐かしい思い出として、あるいは進学や就職に際しての相談や励ましを受けた思い出として、さらに現在でも人生のモデルとして師事しているという場合など、さまざまなタイプがある。

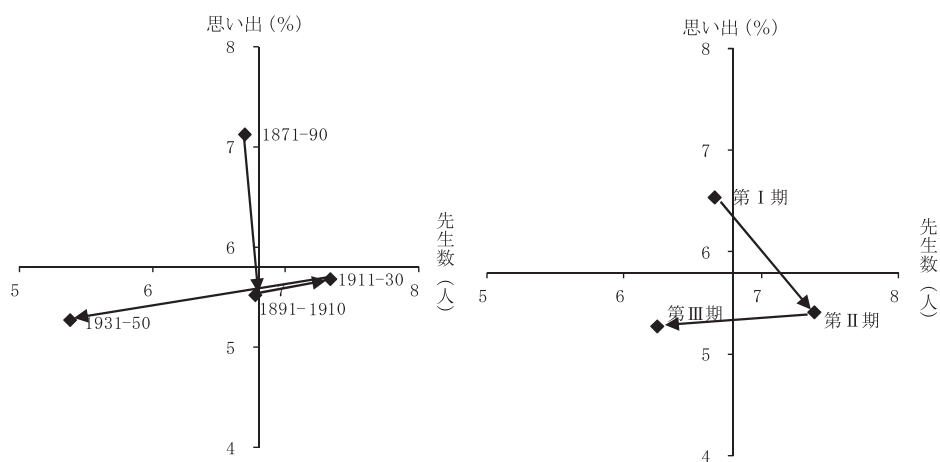


図2 「先生」の思い出の経年変化（出生年） 図3 「先生」の思い出の経年変化（掲載時期）

しかし経年変化をみていくと、人生全体のなかで「先生（師）」の思い出が占める割合は、徐々に減少していくようである。図2は、縦軸に思い出の記述量、横軸に先生数をとって、出生コホート別にプロットし、その経年変化を示したものである。思い出の記述量は、世代が新しくなるほど減少していくことがわかる。先生数も、1911-30年生まれでやや増加するものの、それ以後は大きく減少する。

掲載時期でみるとどうだろうか。図3は、連載が始まった1956年から20年ごとに1975年までを第I期、1976-1995年を第II期、1996-2008年を第III期として、思い出の記述量と先生数の変化を示したものである。第I期から第II期にかけては、先生数はやや増えるものの全体の記述量は大きく減少している。第III期になると、人数、記述量とも減少し、「先生」の位置が小さくなっていく傾向がうかがえる。図2の出生コホートによる経年変化とほぼ同じ傾向を示していることがわかる。

第I期が中等教育のユニバーサル化と高等教育のマス化が進んでいく時期、第II期が高等教育がユニバーサル化していく時期、第III期がその定着後という背景を考えると、高等教育の大

衆化とともに「先生」との関係自体が変化していくのと同時に、その思い出の語りかたも「厚い」思い出から「薄く広い」思い出へと変化し、その後は急速に影が薄くなっていったとみることができる。また、1970年代後半から1980年代前半にかけては、学校暴力や不登校などの学校問題や教育問題がメディアを通して顕在化していった時期である。「師弟関係」を理想化して語ることで自体が時代の空気にそぐわなくなったということもあるだろう。「先生」との実際の変化と、学校や「先生」をめぐる言説や社会的背景の変化の両方が重なって、第Ⅱ期あたりを境に「先生」の思い出記述が減少していったのである。

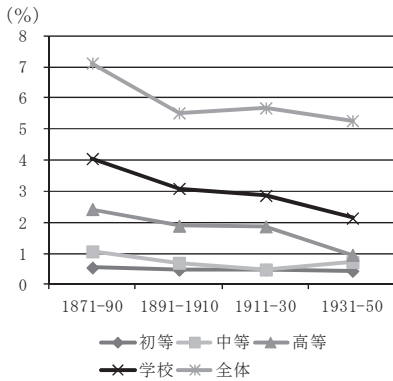


図 4-1 「先生」の思い出の記述量の経年変化 (出生年・学校段階別)

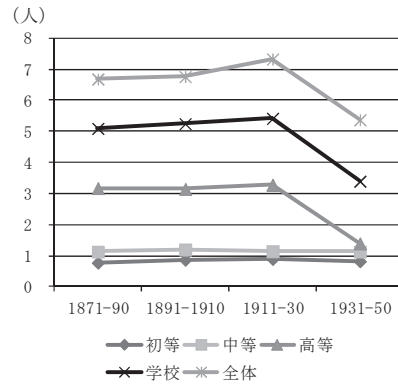


図 4-2 先生数の経年変化 (出生年・学校段階別)

図 4-1、図 4-2 は、図 2 で示した思い出の経年変化のなかで、とくに「学校の先生」の思い出の記述量の変化を学校段階別に示したものである。世代的にみると、主に戦後の学校教育を受けた 1930 年以降生まれの世代では、それ以前の世代に比べて思い出の記述量、人数ともかなり減少している。戦前期に比べて戦後になってからは、「学校の先生」の影が特に薄くなっていったことが推察される。なかでも、初等・中等教育に比べて、高等教育で出会った「先生」についての記述は、戦後に教育を受けた世代でかなり少なくなっていることが目立つ。

ここまで述べてきたことを簡単にまとめておこう。全般的にみれば、『私の履歴書』の著者の多くは、「先生」についてある程度の分量にわたって記述しており、「先生」あるいは「師」が人生を語る上でのひとつのキーワードであった。「学校の先生」と「学校以外の先生」という点からみると、やはり「学校の先生」が記述量、人数ともに多い。しかしその割合は、時代とともに減少する傾向にあり、特に世代でいえば戦後になってから学校教育を受けた年代で、また掲載時期でいえば高等教育の大衆化が進展する 1970 年代後半以降に顕著になってきたとみることができる。図 2、図 3 を合わせてみると、「先生」との実際の変化と、教育の大衆化における「先生」の思い出を語ることの意味の希薄化が同時期に重なっていることがわかるだろう。

3. 職業と「先生」の思い出

すでに述べたように、「先生」の思い出の記述には、記述量、人数ともに個人によってかなり

幅がある。またその記述のしかたも、一人の「先生」について厚く記述するタイプから、たくさんの「先生」の名前を挙げて広く薄く記述するタイプまでさまざまである。そうした違いは、個人的な経験の違いによるだけではない。出生年や掲載時期による思い出の変化については既に述べたが、それ以外にも学歴や学校歴、職業、出身地などの属性による違いも大きいと思われる。どの属性の影響力が大きいかについて重回帰分析を行なった結果を示したのが、表5である。ここから、「先生」の思い出（記述量）に最も影響しているのは職業であることが確認できる。そこで本節では、職業に焦点をあてて、各職業における「先生」の思い出の記述のパターンの特徴を分析する。

表5 「先生」の思い出の記述量の規定要因（重回帰分析）

	モデル1			モデル2		
	B	β		B	β	
(定数)	93.360		**	107.953		**
出生年	-0.047	-0.112	**	-0.055	-0.125	**
年齢	-0.016	-0.018		-0.026	-0.029	
出身地	-0.019	-0.004		0.032	0.006	
幼少時生活程度	0.244	0.028		-0.077	-0.008	
学歴	0.315	0.033				
職業						
芸能・芸術職ダミー	4.569	0.295	***	1.514	0.074	
専門職ダミー	6.007	0.302	***	5.062	0.283	***
文筆ダミー	3.247	0.153	***	1.536	0.076	
政治家ダミー	1.686	0.059		1.595	0.061	
官僚ダミー	-0.501	-0.013		-0.759	-0.022	
学部						
文学部ダミー				3.573	0.191	*
法学部ダミー				0.888	0.059	
経済学部ダミー				1.586	0.109	
医学部ダミー				1.821	0.060	
理学部ダミー				-0.529	-0.017	
農学部ダミー				1.025	0.025	
芸術学部ダミー				5.728	0.221	**
大学						
東大ダミー				1.571	0.117	
京大ダミー				2.018	0.089	
他帝大ダミー				3.783	0.133	*
専門学校ダミー				1.048	0.064	
早稲田ダミー				2.801	0.108	+
慶応ダミー				-0.039	-0.002	
N		545			401	
調整済みR二乗		0.116			0.134	
F値		8.160			3.821	
有意確率		0.000			0.000	

+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6 各職業の「先生」の思い出の傾向

職業	思い出 (%)					先生数 (人)					N
	学校			学校外	全体	学校			学校外	全体	
	幼-中	高	計			幼-中	高	計			
会社経営者	1.1	1.5	2.5	1.3	3.9	1.8	2.9	4.7	0.8	5.5	252
芸術・芸能	0.9	0.8	1.7	5.9	7.7	1.7	1.1	2.8	3.3	6.1	134
専門職	1.7	5.9	7.5	2.1	9.6	3.4	8.3	11.6	2.2	13.9	68
文筆	1.9	2.1	4.0	2.8	6.8	2.5	2.4	5.0	1.8	6.8	61
政治家	1.4	1.2	2.6	2.7	5.3	2.0	2.0	4.0	1.2	5.2	30
官僚	0.7	1.2	2.0	0.9	2.9	2.0	4.1	6.1	1.2	7.3	16
計	1.2	1.9	3.1	2.7	5.8	2.1	3.0	5.1	1.7	6.8	561

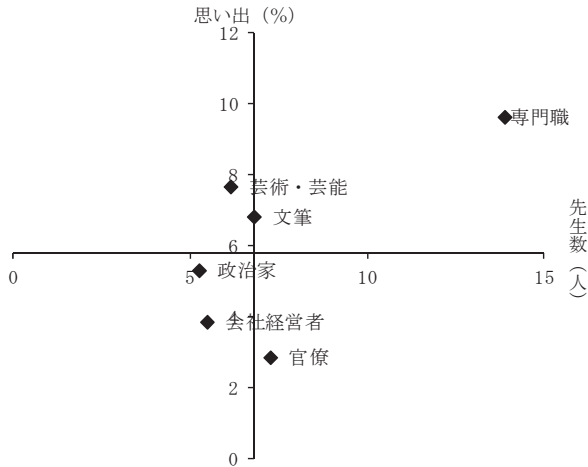


図5 各職業の「先生」の思い出の傾向

9.6 パーセント、先生数が 14 人と、他の職業と比べて突出して多い。「厚く広い」記述のしかたが特徴であり、「先生」との関係が重要な位置を占める職業であることがわかる。

その対極にあるのが会社経営者および政治家である。記述量、先生数ともに少なく、学校・学校外のいずれにおいても、全体的に「先生」の影は薄いということができよう。

一方、先生数は少ないが厚い記述をする傾向があるのが芸術・芸能職である。文筆業もそれに近いところに位置する。これらの職業においては、学校・学校外を問わず、特定の「先生」との密接な関係が思い出として深く刻まれていることがうかがえる。

思い出の記述量が最も薄いのが官僚である。しかし、会社経営者や政治家に比べると、話題のなかに登場する「先生」の人数は専門職に次いで多い。「広く薄い」思い出記述が特徴である。

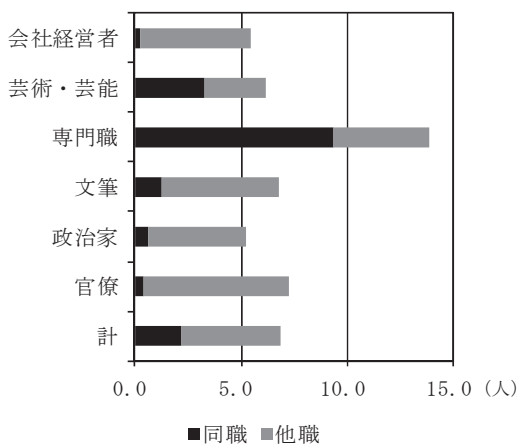


図6 同職・他職の「先生」の内訳 (職業別)

表 6 は、各職業カテゴリー別に「先生」の思い出の記述量、先生数を示したものである。これを、縦軸に思い出の記述量、横軸に先生数をとってプロットしたのが図 5 である。これらを見ると、「先生」の思い出の記述のしかたには、職業によってそれぞれ特徴があることがわかる。

まず、「先生」についての記述量、先生数ともに際立って多いところに位置しているのが専門職である。記述量が

職業による思い出の特徴の意味をよりはっきりさせるために、著者と「先生」の職業が同職かどうかを示したのが、図 6 である⁹。これを見ると、専門職と芸術・芸能職においては、同職の「先生」について記述している割合が、他の職業に比べてかなり高いことがわかる。つまり、「先生」と著者自身が同じ「界」に属している場合が多いのである。これらの職業では、キャリア形成において「先生」が直接的な影響力をもつと同時に、その関係がその後も維持される可

能性も高い。「先生」との関係が基本的に重要な職業であることが確認できる。

逆に、会社経営者や政治家、官僚などは、同じ職業にいる人を「先生」「師」として取り上げているケースは少ない。学校時代の「先生」であれ学校外で出会った「師」であれ、著者自身の職業とは異なった人物を取り上げることのほうが圧倒的に多いのである。「先生」の職業との連続性が弱いこれらの職業の著者にとっては、「先生」の思い出はまたちがった意味と特徴をもつことになるだろう。

このように、職業による「先生」の思い出の特徴や傾向には、各職業において求められる能力やパーソナリティ、キャリア形成における「先生」の地位や役割、教育と職業との連続性など、その職業の「界」としての特徴が映し出されているのである。このような観点から、以下ではさらに、「先生」との関係において特徴的なパターンを示している専門職、芸術・芸能職、会社経営者に焦点をあて、それぞれの「先生」の思い出についてより詳細に分析・検討をしていくことにする。そこから、財界、学界、芸術・芸能界の各界における「先生」の思い出の特徴とその意味を探りたい¹⁰。

4. 専門職における「先生」の思い出

既にみたように、「先生」の思い出の記述量、先生数ともに最も多いのは専門職である。ここに含まれているのは、文系・理系にわたる各学問領域の研究者（大学教員、研究員等）、医学界をリードしてきた医師、裁判官等を含む法曹関係者である。これらの著者たちが『私の履歴書』で語っている内容は、子ども時代の思い出や家庭生活などの一般的な記述を除けば、やはり著者自身の学問形成の過程や研究生生活が中心になっている。そのなかでは、現在までに出会ったさまざまな「先生」の思い出やエピソードが語られることも多い。平均すると、記述全体の約10パーセントが「先生」の思い出で占められており、そこに登場する先生数も14人にのぼる。いずれも全体の平均の2倍に近い。その思い出のほとんどは、「学校の先生」、特に旧制高校や大学、大学院を含む高等教育時代の「先生」との関係やエピソードに集中していることも特徴的である（表6）。すでに指摘したように、専門職においては大学時代の「先生」は、同じ職業の先達として学生時代に受ける影響も大きく、またその後も関係が持続することが多い。「先生」との同職率の高さもそれを示している。その意味では、職業キャリアと縁の深い大学時代の「先生」との関係が、特に重要な意味と役割をもっているといえるだろう。

その語りかたの特徴は、あとで述べる芸術・芸能職の場合とは異なり、ひとりの「先生」について厚く記述するというよりも、同じ専門領域の「先生」を中心に、直接、間接に影響を受けた「先生」の思い出を豊富に語っていくというスタイルが多いことである。たとえば、貝塚茂樹は、所属していた京大の東洋史研究室で指導を受けた桑原隲藏、内藤湖南をはじめとして坂口昂、西田直二郎、狩野直喜など文学部を中心とした「先生」たちとの交流についてさまざまなエピソードとともに豊富に語っている。また、東大法学部教授であった田中耕太郎の思い出には、旧制高校時代に教わった夏目漱石や岩元禎から帝大時代に指導を受けた上杉慎吉、穂積重遠、岡野敬次郎等、当時の有名教授が数多く登場する。

これらの思い出を読んでいくと、それぞれの学問「界」のもつ特有の雰囲気がよく伝わってくる。そこには、「先生」との交流や関係を通して、専門的な知識を獲得していく知的形成の過

程と同時に、その領域に特有のもののかたや雰囲気身を身につけていくプロセスが具体的に描かれているのである。それはまた、「界」における社会的ポジションの形成過程として読むこともできる。これらの例をみていくと、専門職業人としての知的・人間的・社会的形成にとって、「先生」の存在が大きいことがうかがえる。

では、「先生」との関係は、大学や専門領域によってどのくらい違いがあるだろうか。図7は、専門領域別に思い出の傾向を示したものである。これも縦軸が記述量、横軸に先生数である。これをみると、専門職のなかでも人文系と医学系の領域では、「先生」との関係が特に重要であることがわかる。法・経済系は平均に近いところに位置し、理系は相対的にみれば「先生」との関係があまり強く意識されていないといえるだろう。

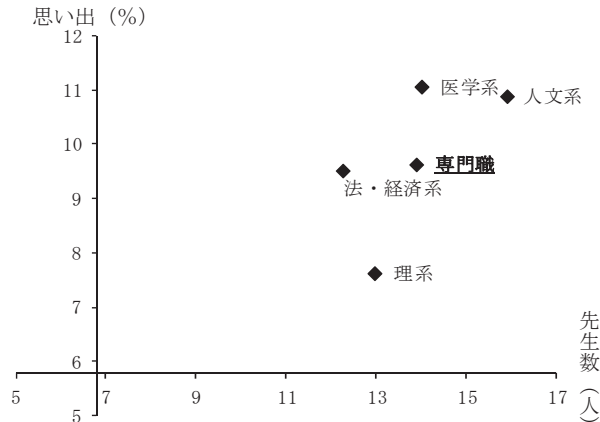


図7 専門職：専門領域と「先生」の思い出の傾向

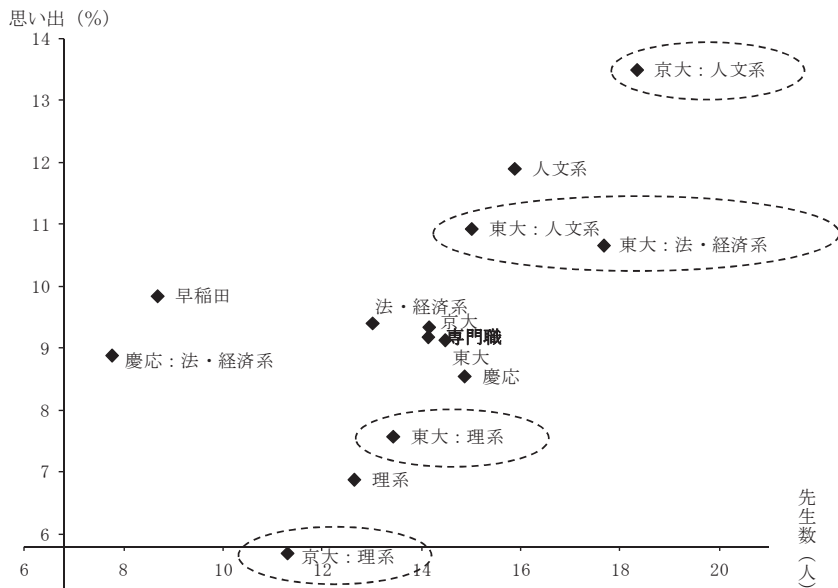


図8 専門職：大学、専門領域と「先生」の思い出の傾向

これを、専門職を主に輩出している東大・京大・慶應大・早稲田大の4大学についてそれぞれプロットしたのが図8である。さらに専門領域と合わせてみていくと、東大・京大は全体では近い所に位置するものの、文系・理系ではかなり違いがある。特に京大の場合は人文系と理系とでかなり異なっていることがわかる。

表7 専門職：高等教育の「先生」の専門領域の割合（%）

専門領域	同職						計	先生数	N
	同領域	他領域							
		人文系	法・経済系	医学系	理系	計			
人文系	95.3	—	0.4	0.0	4.3	4.7	100.0	10.5	19
法・経済系	71.2	23.1	—	0.0	5.7	28.8	100.0	8.3	12
医学系	76.2	13.1	1.5	—	9.2	23.8	100.0	10.7	15
理系	85.5	8.5	1.6	4.4	—	14.5	100.0	8.0	22
計	83.5	9.9	1.0	1.5	4.2	16.5	100.0	9.3	68

著者自身の専門領域と「先生」の領域との関係についてはどうだろうか。表7は、高等教育の「先生」について、専門領域の近さによって人数と割合を示したものである。いずれの専門においても同領域の「先生」が圧倒的に多く挙げられているが、特に人文系においては95.3パーセントが同領域である。人文系研究者にとっては、近接領域を含めた人文諸学の「先生」との交流が専門性の基礎になっているからであろう。法・経済、医学、理系の専門職でも同領域の「先生」との関係が中心的に記述されているが、他領域では人文系の「先生」が挙げられることが多い。そのなかには、旧制高校時代の教師も含まれている。いわば、人文系の「先生」との交流やその思い出は、専門とは異なる「教養」への関与のしかたを示すものとみることができるだろう。専門職においては、それぞれの専門の「界」のなかでの直接的な指導関係や人文系の「先生」を中心とした他領域の「先生」との交流を含めて、「先生」とのタテ・ナナメを含む上下関係が重要な位置を占めていることがあらためて確認できるだろう。

このような傾向は、少なくとも量的な面からいえば、世代による変化はあまりみられない。

図9は、専門職における記述量の経

年変化を示している。既に前節でも指摘したように、職業全体では「先生」の記述量、先生数のいずれも、世代が新しくなるにつれて徐々に減少する傾向がみられる。特に「学校の先生」についてはよりその傾向がはっきりしている。しかし、図9でもわかるように、専門職においては、記述量でみると1911-30年生まれでやや減少するものの、1931-1950年生まれではむしろ増加しており、全体としては「先生」の意味が薄れていないように思われる。

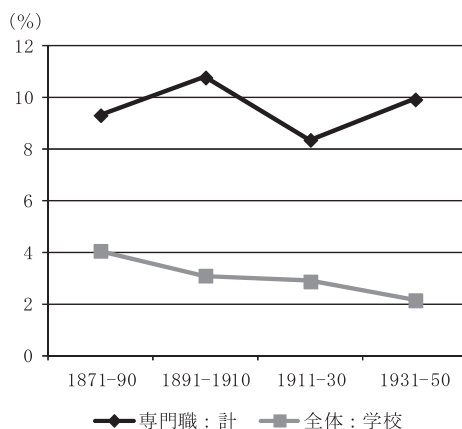


図9 専門職：「先生」の思い出の記述量の経年変化

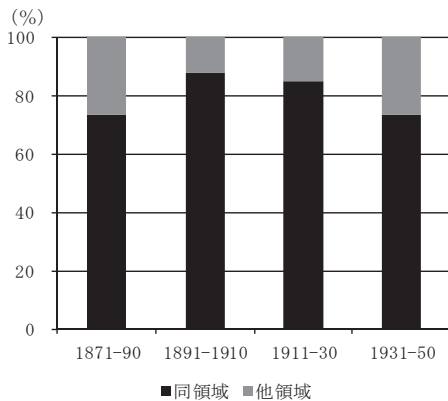


図 10 専門職：「先生」の同領域／他領域の割合の経年変化

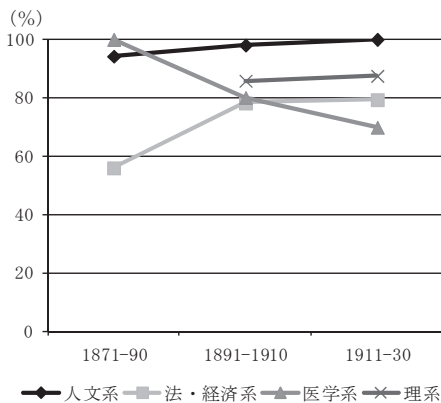


図 11 専門職：「先生」の同領域率の経年変化（専門領域別）

しかし、同領域／他領域の「先生」との関係については、専門領域によって経年変化にも特徴がみられる。図 10 のグラフは、「先生」の領域との関係の経年変化を示したものである。1871-90 年代生まれの世代では、他領域の「先生」の割合が相対的に高い。1891-1910 年代、1911-30 年代生まれでは、同領域の割合がより高くなっている。そして 1931-50 年生まれになると、また他領域の「先生」の割合が増加する傾向が表われている。数値からだけでは変化の理由を説明することはむずかしいが、「教養」に対する関与の変化や、各研究分野の専門分化の進展とも関連しているのかもしれない。

そのことを推測させるのが、図 11 である。これは、専門領域別に、同領域率の経年変化を示したものである。人文系、法・経済系では同領域率が高まっていく傾向がみられる。法・経済系では人文系の教養よりも専門領域での関係が重視されるようになったのかもしれない。逆に、医学系では同領域率は減少している。医学領域の専門性自体は高くなっていくことを考えると、「先生」の他領域化が進む

ことが医学界自体の開放性につながっているというよりも、専門の仕事上の「先生」と「先生の師」とが分かれていく傾向なのかもしれない。それについては、思い出の内容の質的分析と合わせて、さらに検討する必要があるだろう。

専門職においては、大学の世界と職業の世界がつながってひとつの「界」を構成していることが多い。したがって、大学時代の「先生」との関係も、思い出としてだけでなく実際に持続している場合が少なくない。専門職では「先生」とくに「学校の先生」についての記述量が多くなり減少しないのも、そうした職業的特性によるところが大きいだろう。

しかしより詳細にみていくと、医学領域を除けば、専門領域の「先生」の思い出の割合が多くなるという傾向があることも興味深い。専門分化の進展と「界」の流動性／閉鎖性の関係が、「先生」の思い出の変化にも表われているのかもしれない。

5. 芸術・芸能職における「先生」の思い出

専門職とならんで、「先生（師）」との関係が厚く語られているのが、芸術・芸能職である。

記述量でみると、専門職に次いで多い(表6参照)。しかし、専門職の場合とは違って、「先生」についての記述量が多いが、その人数は6人と全体の平均よりも少ない。別のいいかたをみると、先生一人についての記述量という点では他の職業と比べて最も多く、特定の「先生」の思い出を厚く記述する傾向がみられるのである。またその対象になっているのは、「学校の先生」よりも主に芸事や習い事の師匠など「学校外の先生」が多いのも特徴である(表6参照)。

芸術・芸能職には、茶道、落語、歌舞伎といった伝統芸能から日本画や現代美術、クラシック音楽、写真、スポーツまで幅広い領域が含まれている。これらの職業においては、職業に必要な知識の習得だけでなく、身体感覚や感性を媒介としてその世界を体得していくことが求められる。そうした知識や技は、「先生」との1対1の対面的な関係のなかで伝授されることが多く、したがって「先生」との関係も密接になる。特定の「先生(師)」について詳述する傾向が強いのはそういう場合もあるからだろう。

しかし、同じ芸術・芸能職でも、その語りかたは一樣ではない。たとえば、小学校を出てすぐに師について徒弟修業をするような場合と、高等教育を経て芸術・芸能の世界に入る場合とでは、「先生」の思い出やその語りかたに違いがあっても不思議ではないだろう。また、歌舞伎や伝統美術などの伝統部門と、クラシック音楽や現代美術、映像関係などの近代部門とでは、「先生」との関係も異なっているように思われる。

表8 芸術・芸能職：「先生」の思い出の傾向(伝統／近代部門別、学歴別)

伝統／近代部門	学歴	思い出(%)			先生数(人)			N
		学校	学校外	全体	学校	学校外	全体	
伝統	高等教育	5.0	6.3	11.3	7.8	3.8	11.6	16
	中等教育	0.7	8.7	9.4	1.4	4.4	5.8	17
	初等教育	0.3	10.2	10.6	0.6	5.3	5.9	29
	計	1.6	8.8	10.4	2.7	4.6	7.3	62
近代	高等教育	2.8	3.0	5.8	4.4	2.0	6.4	36
	中等教育	1.0	3.6	4.6	2.0	2.0	4.0	23
	初等教育	0.8	4.2	5.0	1.1	2.3	3.4	9
	計	1.9	3.4	5.3	3.1	2.0	5.2	68
計		1.8	6.0	7.7	2.9	3.3	6.2	130

そうした観点から、伝統／近代部門別、さらに学歴別の思い出を示したのが表8である。ここからまず明らかなのは、伝統部門と近代部門では、「先生」についての記述のしかたが量的にみても大きく異なっていることである。記述量でみると、伝統部門では10.4パーセントと全体の平均(5.8パーセント)を大きく上回っているが、近代部門ではむしろ全体平均よりも少なくなっている(5.3パーセント)。つまり、芸術・芸能職においては、人生のなかで「先生(師)」の存在が重要な位置を占める伝統部門と、さほど重視されていない近代部門とに、まず大きく分かれるのである。

伝統部門のなかでは、さらに著者の最終学歴によるちがいが大きい。芸術・芸能職では「学校の先生」よりも「学校外の先生」についてより多く記述される傾向があるが、それが最も顕著なのは伝統部門のなかでも初等教育卒の人たちである。「学校外の先生」についての記述量は、芸術・芸能職のなかでも最も多く(10.2パーセント)、職業全体の平均(2.7パーセント)と比較すると3倍以上になっている。

落語や文楽、友禅などの伝統芸術・芸能の世界では、小学校を卒業してすぐに師匠に弟子入

りし、生活を共にしながら知識や技術を学ぶと同時に、その世界に独特のもの見かたや作法を身につけていくというスタイルが多い。このような伝統的な徒弟制や師弟制度においては、「先生（師）」との公私にわたる長期の関係のなかで、量的にも質的にも密接な関係が形成されていく。また、ほとんどの場合は「先生（師）」と同じ職業につくため、その後も関係が持続することが多い。自己形成にとって大きな影響力をもつ特定の「先生（師）」の思い出に焦点をあてた記述のしかたは、伝統的な師弟関係に特徴的なパターンといえるだろう。たとえば、尾上梅幸（歌舞伎）、山口華揚（友禅師）、桐竹紋十郎（文楽）等はこのタイプである。

しかし、同じ伝統部門であっても、高等教育経験者の「先生」の思い出記述にはまた異なった傾向がみられる。初等教育卒に比べると、「学校の先生」の思い出の割合が高くなっているのは当然のことであろう。しかし「学校外の先生」も半分以上を占めており、全体として「先生（師）」の思い出が占める割合は11.3パーセントと、伝統部門のなかでも最も高くなっている。登場する先生数も12人と多く、芸術・芸能職の平均（6人）の2倍である。小堀宗慶（茶道家：東京美術学校日本画科中退）、山本丘人（日本画家：東京美術学校日本画科卒）などは、このタイプである。ここでは、学校・学校外を含めてさまざまな「先生」の思い出が豊富に語られる傾向がみられる。その意味では、専門職の「先生」の思い出の語りかたに近いといえることができるだろう。

一方、近代部門においては、他の職業に比べれば、学校よりも学校外の「先生」のほうが上回っているという特徴はあるものの、いずれもあまり多くはない。また、学歴による思い出のちがいについてもとくに顕著というほどではない。おしなべて、近代部門の芸術・芸能職においては、「先生」の存在はさほど大きな意味をもっていないといえることができるだろう。このタイプとしては、たとえば村上信夫（帝国ホテル料理長）、土門拳（写真家）、谷口吉郎（建築家）、古賀政男（作曲家）、岩田専太郎（画家）、別所毅彦（野球解説者）などが挙げられる。

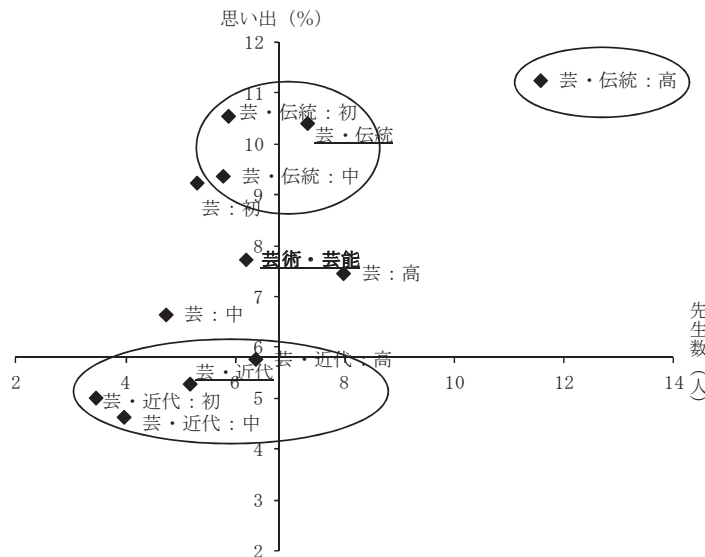


図12 芸術・芸能職：伝統／近代部門、学歴と「先生」の思い出の傾向

以上のような特徴をまとめたのが図 12 である。これを見ると、学校、学校外を含めてさまざまな「先生」の思い出を豊富に語る高学歴・伝統部門に多くみられるタイプ、少数の特定の「先生」に絞ってその思い出を詳述する初等・中等卒の伝統部門に典型的なタイプ、記述量・先生数ともに薄い近代部門タイプという 3 つのタイプに分かれることがみてとれるだろう。

表 9 芸術・芸能職：「先生」の職業の割合（％）

分野	伝統／近代部門	同一職	近接職	他職	計	先生数	N
音楽	伝統	41.7	30.0	28.3	100.0	8.0	2
	近代	16.3	28.2	55.6	100.0	7.3	15
	計	19.2	28.4	52.4	100.0	7.3	17
美術・工芸	伝統	39.0	24.2	36.8	100.0	8.1	25
	近代	24.1	23.5	52.4	100.0	5.4	29
	計	31.0	23.8	45.2	100.0	6.6	54
芸能・スポーツ	伝統	52.6	22.6	24.7	100.0	6.7	36
	近代	16.5	14.3	69.3	100.0	3.3	23
	計	38.5	19.4	42.1	100.0	5.3	59
計		32.9	22.4	44.7	100.0	6.1	130

さらに、「先生」との関係の濃さと広がりを見るためのもうひとつの視点として、「先生」の職業との近さによってその傾向をみたのが、表 9 である。音楽（伝統／近代）、美術・工芸（伝統／近代）、芸能・スポーツ（伝統／近代）のそれぞれの分野について、著者と「先生」が同じ職（「同一職」）、近い分野の職業（「近接職」）、まったく別の職業（「他職」）に分類した¹¹。

これを見ると、どの分野でも伝統部門では「同一職」の「先生」が多く挙げられており、ほぼ 40 パーセントくらいを占めていることがわかる。「近接職」を合わせると「先生」全体の 70 パーセント近くになっている。ここでも、著者と同じ職の「先生」との関係が核になっていることが確認できる。それに対して、近代部門の場合には、著者と「同一職」の人物を「先生」として挙げる割合は高くない。職業キャリアの形成にとって、職業に直結する「先生」とのタテの関係はあまり強くないことがうかがえる。

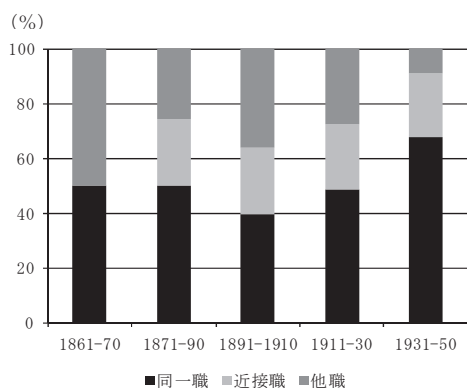


図 13-1 芸術・芸能職【伝統部門】：「先生」の職業との関係の経年変化

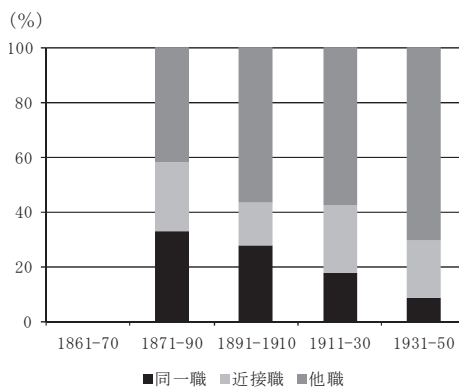


図 13-2 芸術・芸能職【近代部門】：「先生」の職業との関係の経年変化

さらに、こうした傾向が世代によって変化しているかどうかをみたのが、図 13-1、図 13-2 である。図 13-1 から、伝統部門においては世代が新しくなるにしたがって、「同一職」の「先生」を挙げる割合が高くなる傾向があることがわかる。1931-50 年代生まれでは 70 パーセント近くが「同一職」の「先生」で占められている。逆に、近代部門においては、世代とともに自身の職業とは異なる「先生」（他職）の割合が高くなっていく（図 13-2）。近代部門では取り上げられる先生数自体が減っていくことと合わせて考えると、職業においても人生においても「先生」が与える影響がますます小さくなっていることがうかがえる。

このように、芸術・芸能職においては、伝統部門では直接の「先生」との関係がより重要な位置を占めるようになる一方で、近代部門では「先生」の存在がますます希薄化していくという二極化が進んでいることがわかる。伝統部門では伝統の継承を軸としたよりクローズドな関係によって「界」が維持されていく傾向があるのに対して、近代部門では、「界」の境界がますます曖昧化しつつあるということもできるだろう。

ただし、伝統部門については、全体では同一職の占める割合が世代とともにより高くなっていくなかで、高等教育卒だけが低くなっていることは興味深い（図 14）。直接、職業に結びつ

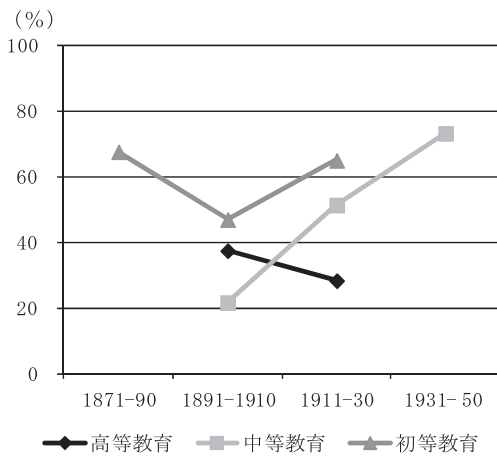


図 14 芸術・芸能職：【伝統部門】学歴別「先生」の同一職率の経年変化

く「先生」だけでなく、近接する他領域や違う分野の「先生」についても積極的に語る傾向がうかがえるのである。たとえば、陶芸家の藤原啓（早稲田大学英文科聴講生）や日本画の加山又造（東京美術学校日本画科卒）など伝統の革新にチャレンジした人物が、直接教わった「先生」だけでなく、他領域の「先生」や別の職業にある「人生の師」から多くを学んだことを思い出として記述していることは示唆的である。それについては、伝統の「界」の維持と革新への志向性という角度から、より詳細に分析していく必要がある。

6. 会社経営者における「先生」の思い出

それでは、戦前・戦後を通して日本の社会の中心を担ってきた経済エリートであり、また「私の履歴書」の執筆者のほぼ半分近くを占めている会社経営者にとって、人生において「先生（師）」はどのような意味をもっていたのだろうか。

既に述べたように、他の職業と比べて会社経営者の場合、人生全体の記述のなかで「先生」の思い出が占める割合は低い（表 6 参照）。おしなべてみると、会社経営者にとっては「先生」の存在はあまり大きな意味や影響力をもっていないということになるだろう。

しかし、先にみた専門職や芸術・芸能職と会社経営者とは、「先生」の意味がそもそも異なっていることに注意する必要があるだろう。会社経営者の場合、「先生」と著者自身の職業との

連続性はほとんどなく、その意味では現在まで続く現実的、機能的な関係ではない。学校時代の「先生」との関係は、純粋に過去の思い出として語られることが多いのである。また、「学校外の先生」として挙げられている人物も、多くは趣味の習いごとや宗教上の関係など私生活で出会った「人生の師」である。会社の上司や仕事上の関係にある人物が「師」として取り上げられることはほとんどない。会社経営者にとっての「先生」は、学校、学校外を含めて、職業キャリアとは直接つながらない純粋な思い出、あるいは「人生の師」としてのシンボリックな意味合いが強いのである。

会社経営者のなかでは、会社の性質や経営者タイプの違い、あるいは出身学校・学歴によって「先生」の思い出にも異なった傾向がみられる。ここでは、会社経営者のタイプを「創業者型」「家業継承型」「専門経営者型」「財閥系企業経営者型」「官僚転向型」の5つに分類し、それぞれについて学歴別にその思い出を分析・検討した¹²。

まず、表10は、各タイプに分類される会社経営者の内訳を示したものである。これをみると、まずすべてのタイプで高等教育卒の割合が高いことがわかる。会社経営者全体の83.3パーセントが高等教育卒なのは「私の履歴書」の特徴でもあるが、とくに「財閥系企業経営者型」と「官僚転向型」ではすべて高等教育卒である。初等教育・中等教育卒の場合は、主に「創業者型」である。初等・中等教育卒を合わせると50パーセントを超えている。

表10 会社経営者：経営者タイプの内訳（学歴別）

経営者タイプ	初等教育		中等教育		高等教育		計	
	N	%	N	%	N	%	N	%
創業者型	22	38.6	8	14.0	27	47.4	57	100.0
家業継承型	1	3.3	4	13.3	25	83.3	30	100.0
専門経営者型	2	1.8	5	4.6	102	93.6	109	100.0
財閥系企業経営者型		0.0		0.0	36	100.0	36	100.0
官僚転向型		0.0		0.0	20	100.0	20	100.0
計	25	9.9	17	6.7	210	83.3	252	100.0

表11 会社経営者：「先生」の思い出の傾向（経営者タイプ別、学歴別）

経営者タイプ	学歴	思い出 (%)						先生数 (人)						N
		学校			学校外	全体	学校			学校外	全体			
		幼-中	高	計			幼-中	高	計					
創業者型	初等教育	0.3	0.0	0.3	1.4	1.6	0.6	0.0	0.6	0.7	1.3	22		
	中等教育	1.0	0.0	1.0	2.2	3.3	1.1	0.0	1.1	1.6	2.8	8		
	高等教育	0.9	1.0	1.9	1.7	3.6	1.5	2.5	4.0	1.1	5.1	27		
	計	0.7	0.5	1.1	1.6	2.8	1.1	1.2	2.3	1.0	3.3	57		
家業継承型	初等教育	0.0	0.0	0.0	2.1	2.1	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0	1		
	中等教育	3.0	0.0	3.0	4.3	7.3	2.5	0.0	2.5	3.3	5.8	4		
	高等教育	0.6	1.3	1.9	1.0	2.9	1.2	1.8	2.9	0.6	3.6	25		
	計	0.9	1.0	2.0	1.5	3.5	1.3	1.5	2.8	1.0	3.8	30		
専門経営者型	初等教育	0.0	0.0	0.0	2.8	2.8	0.0	0.0	0.0	1.0	1.0	2		
	中等教育	1.0	0.0	1.0	2.4	3.5	1.0	0.0	1.0	0.8	1.8	5		
	高等教育	1.2	1.8	2.9	1.3	4.3	2.0	3.5	5.5	0.6	6.1	102		
	計	1.1	1.7	2.8	1.4	4.2	1.9	3.2	5.1	0.6	5.8	109		
財閥系企業経営者型	高等教育	1.5	2.5	4.1	0.7	4.7	2.9	5.5	8.3	0.8	9.1	36		
官僚転向型	高等教育	1.1	1.8	2.9	1.1	4.0	2.2	3.1	5.3	0.6	5.8	20		
計		1.1	1.5	2.5	1.3	3.9	1.8	2.9	4.7	0.8	5.5	252		

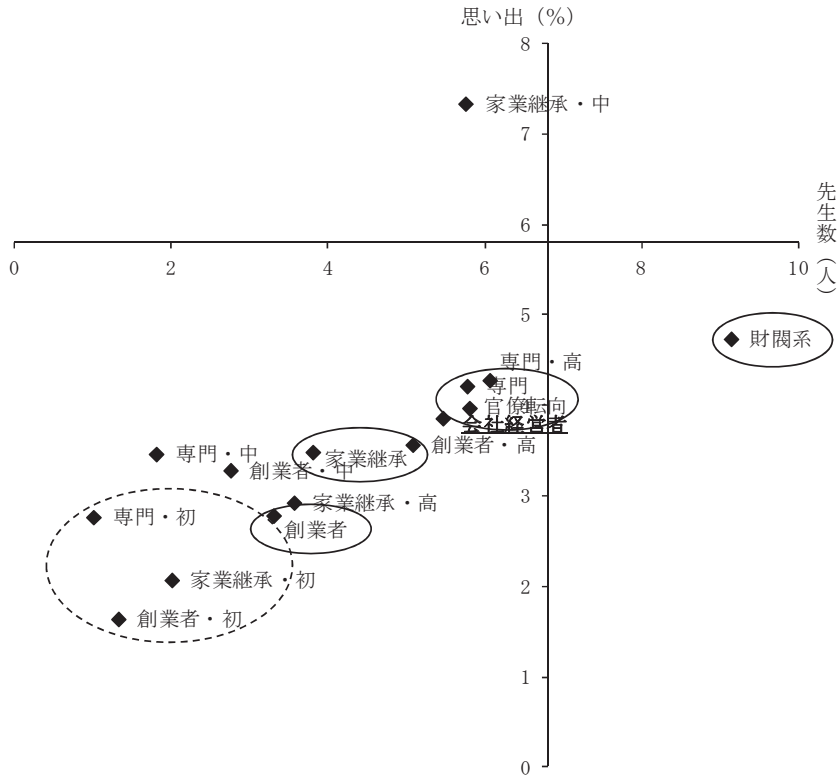


図 15 会社経営者：「先生」の思い出の傾向（経営者タイプ別、学歴別）

表 11 は、各タイプにおける「先生」の思い出の記述量・先生数をまとめたものである。図 15 は、それを図にプロットして示している。縦軸が記述量、横軸が先生数になっている。

図 15 から一見してわかるように、記述量、先生数ともに最も少ないところに「創業者」、次が「家業継承」、さらに「官僚転向」「専門経営者」、記述量、先生数ともに最も多いところに「財閥系企業経営者」と、右斜め上方に向かってほぼ直線的に並んでいる。

「先生」の思い出が最も少ないのは初等教育卒の「創業者型」であるが、初等卒の「家業継承型」と「専門経営型」もそれに近いところに位置しており、「初等卒」と「創業者型」とは類似したグループとみることができよう。これらのタイプでは、「学校の先生」が少ないのは当然だが、「学校外の先生」も決して多くなく、人生のなかで「先生」という存在が占める意味は希薄だといえる。

その特徴を示す例として、「先生」についてまったく触れていない人物をみてみよう。表 12 は、「先生」についてまったく記述していない 31 名の内、21 名を占める会社経営者のリストである。これをみると、大半が「創業者型」であることがわかる。その記述内容の多くは、著者自身を中心とした話題で占められており、「先生」「恩師」といった上下の関係についてはほとんど出てこない。「創業者型」の職業キャリア形成、人間関係とその意識の特徴がうかがえて興味深い。

表 12 会社経営者：「先生」について記述のない著者

No.	名前	掲載時役職	出生年	経営者タイプ	学歴
1	大谷竹次郎	松竹会長	1877	創業者型	初等
2	大谷米太郎	大谷重工業社長	1881	創業者型	初等
3	井上貞次郎	聯合紙器社長	1882	創業者型	初等
4	遠山元一	日興証券会長	1889	創業者型	初等
5	司忠	丸善社長	1893	創業者型	初等
6	松下幸之助	松下電器産業相談役	1894	創業者型	初等
7	山崎種二	山崎証券社長	1893	創業者型	初等
8	小原鉄五郎	城南信用金庫理事長	1899	創業者型	初等
9	安井正義	ブラザー工業会長	1904	創業者型	初等
10	安藤百福	日清食品会長	1910	創業者型	初等
11	潮田健次郎	住生活グループ前会長	1926	創業者型	初等
12	岡野喜太郎	駿河銀行頭取	1864	創業者型	中等
13	永田雅一	大映社長	1906	創業者型	中等
14	藍澤彌八	東証理事長	1880	創業者型	高等
15	江頭匡一	ロイヤル創業者取締役	1923	創業者型	高等
16	川崎大次郎	第百生命保険会長	1906	家業継承型	高等
17	横河正三	横河電機名誉会長	1914	家業継承型	高等
18	嶋田卓彌	蛇の目ミシン工業社長	1901	専門経営者型	初等
19	平塚常次郎	日魯漁業社長	1881	専門経営者型	高等
20	内ヶ崎賛五郎	東北電力社長	1895	専門経営者型	高等
21	高橋政知	オリエンタルランド相談役	1913	専門経営者型	高等

それとは逆に、高学歴グループの「財閥系企業経営者」「専門経営者」「官僚転向」になると、記述量、人数ともに増加する。とくに「財閥系」の会社経営者では、記述量は平均より少ないものの、先生数は9人と平均以上である。その多くは大学時代の「先生」の思い出であるが、内容は、授業やゼミの様子から就職の世話になったことまでさまざまである。それらのエピソードからは、「先生」との関係のなかで職業人としての基礎的なパーソナリティや教養の土台がつくられていったことがうかがえる。たいていは、ただ懐かしい思い出として語られることが多いが、なかには日本郵船会長を務めた菊地庄次郎のように、大学時代の指導教官であった河合栄治郎を、常に自身のキャリアの指針としていたような人物もある。かつての財界人のひとつのタイプを示しているということもできるだろう。

やや横道にそれるが、高等教育卒のなかで、大学別のカラーの違いがあるかどうかをみたのが図 16 である¹³。人数のまとまりがある東大・京大・一橋・早稲田・慶応の5大学についてプロットしている。「先生」の存在が稀薄なのが一橋・慶応で、会社経営者の平均とほぼ同じところに位置している。東大はそれに近いが、挙げられる先生数は一橋・慶応よりやや多くなっている。特定の「先生」との思い出を厚く記述する傾向

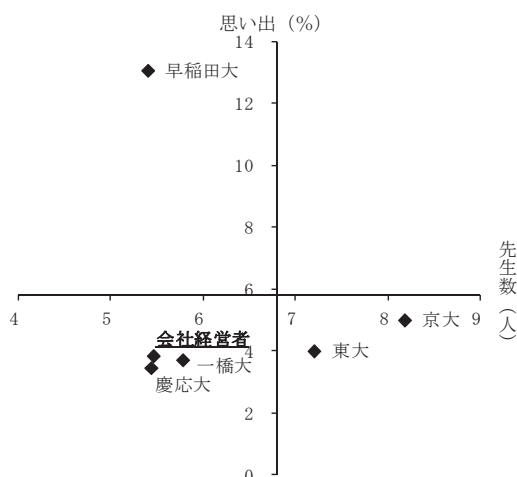


図 16 会社経営者：「先生」の思い出の傾向 (大学別)

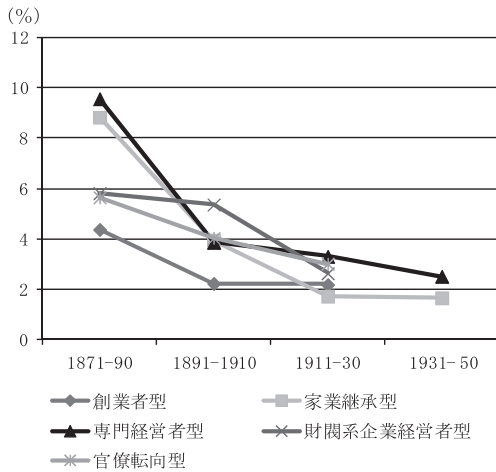


図 17 会社経営者：「先生」の思い出の記述量の経年変化（経営者タイプ別）

がある早稲田と、さまざまな先生の思い出が登場する京大は、大学のカラーが表われているといえるかもしれない。

このような経営者タイプによる「先生」の思い出の特徴は、世代によってどう変化しているのだろうか。図 17 は、思い出の記述量について、タイプ別に経年変化を示したものである。

これをみると、「先生」の思い出の記述量は、特に「専門経営者型」「家業継承型」で大きく減少していることがわかる。その結果、1931-50 年生まれの世界では、経営者タイプによる違いがほとんどなくなっている。会社経営者においては、学歴エリート of 典型的なコースである「財閥系企業」「専門経営者」を含めて、「先生」の影響力はますます小さくなりつつある。

7. まとめと考察

以上、『私の履歴書』をもとに、各界を代表する著名人が「先生」の思い出をどのように記述しているのかについて、主に量的な側面から分析・検討してきた。

旧制の学校時代の「先生」の思い出から丁稚奉公や徒弟修業における「師弟関係」まで、『私の履歴書』には、「先生」とのさまざまな関係が思い出として記述されている。本稿では、「先生」の思い出の記述量・先生数を軸とした量的側面の分析によって、そうした職業による違いや特徴をある程度、抽出することができた。

学者、医師、裁判官を含む専門職の著者に多くみられるのは、直接指導を受けた「先生」や、やや離れた関係の「先生」まで含めて、「先生」の思い出を豊富に語るタイプである。いわばタテ・ナナメを含む「先生」との関係が重要な位置と意味をもっている職業に特徴的にみられるタイプといってもいいだろう。

一方、伝統芸術や伝統芸能の著者に特徴的にみられるもうひとつのタイプが、少数の「先生」との公私にわたる思い出の厚い記述である。伝統的な「師弟関係」の特徴をうかがわせるようなタテ関係を中心とするタイプである。ただし、伝統部門でも高等教育卒の場合は専門職タイプに近づく傾向があったことは興味深いところである。しかし同じ芸術・芸能でも、近代部門では「先生」の記述自体が少ない。その点では会社経営者のほうに近いといえるかもしれない。

日本の経済界を担ってきた会社経営者にとっては、全体的にみると「先生」は現実的にも回想の上でもあまり重要な位置を占めていないようである。その傾向は、大企業経営者も含めてますます顕著になりつつある。「先生」の思い出が希薄なタイプである。

これらの思い出は、世代とともに少しずつ変化もしている。まず、会社経営者も含めて一般的に、「先生」の思い出記述は減少していく傾向があり、その意味では「先生」の存在が希薄化していく傾向がみられることである。もうひとつは、「先生」と同じ「界」を共有する専門職や伝統芸術・芸能のような場合、専門領域の「先生」との思い出に集中していく傾向があることである。専門分化と「界」の閉鎖性の関係を考えると、「先生」との関係もトータルなものから機能的なものに限定されつつあることと関連しているのかもしれない。

「先生」との関係の全般的な希薄化と限定化といった傾向は、フラット化が進むといわれる現代における社会関係やネットワークを考える上でも興味深いところである。

おわりに

本稿では、主に戦前生まれの著者の「先生」の思い出とその変容について、主に量的な側面に限定して分析・検討した。そのなかで、出生コーホートによって思い出に変化がみられると同時に、掲載時期でいうと1970年代後半を境に、「先生」の記述量・先生数ともに減少するという変化が見出された。今後、より若い世代について分析を進めていくことによって、こうした変化の意味をより明らかにしていくことが必要である。その際、「先生」の思い出という回顧データの特性を生かして、その機能的意味、象徴的意味についてさらに分析を精緻化していきたいと考えている。「先生」の思い出の量的・質的の両面からの分析と考察を進めるつもりである。

こうした研究を土台に、財界人・文化人の教育と社会的ネットワークを視野に収めた研究へと発展させていくことが今後の課題である。

【註】

¹磯部卓三「日本之企業経営者の来歴——『私の履歴書』の分析を通して——」、神戸女学院大学研究所、『論集』第24巻、第3号、1978年、pp.49-74

鳥羽欽一郎『日本における企業家・経営者の研究—「私の履歴書」掲載167人のサンプルを中心として—』早稲田大学産業経営研究所、1987年

²浜口恵俊『日本人にとってキャリアとは—一人脈のなかの履歴—』日本経済新聞社、1979年

石岡学「生きられた『学歴エリート』の世界—学歴社会黎明期における高学歴男性の教育経験」小山静子編『育つ・学ぶ』の社会史』藤原書店、2008年、pp.179-228

³師弟関係、教師・学生関係の類型やその歴史の変容について論じたものとしては以下のようなものがある。

稲垣恭子「アカデミック・コミュニティのゆくえ」稲垣恭子編『教育文化を学ぶ人のために』世界思想社、2011年

ウォーラー,W、石山脩平・橋爪貞雄訳『学校集団—その構造と指導の生態』明治図書出版、1957年

ブルデュー,P、安田尚訳『教師と学生のコミュニケーション』藤原書店、1999年

宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学』学文社、2011年
山折哲雄『教えること、裏切られること—師弟関係の本質』講談社、2003年

- ⁴掲載された人物のほとんどは日本人男性であり、日本人女性はごく少数である（2008年
末までで33名）ため、分析から除外した。また、1995年以降には外国人も掲載されるよ
うになっている（2008年末までで21名）が、本研究の射程から外れるため、これについ
ても分析から除外した。
- ⁵したがって本稿では、主に執筆者の出生年コーホートを軸とした分析を行なっている。
ただし、解釈にあたっては掲載時の社会的背景にもできるだけ配慮するようにしている。
- ⁶『私の履歴書』のなかでは、「先生」「恩師」「師弟関係」といったさまざまな表現が使用
されている。それ自体、分析の対象として興味深いのが、ここではそれらを明確に定義し
て区別するのではなく、それらをゆるやかに括る互換的なカテゴリーとして扱っている。
- ⁷行の途中で文章が終わる部分もあるが、文章が行の半分を超えている場合は1行とカウ
ントし、半分を超えていない場合は0行とカウントした。また、上が写真で、下半分が
文章のページに先生の思い出記述がある場合、行数に×0.5をして計算した。
- ⁸「学校の先生」は、著者が在学中に出会った学校の先生であり、「学校外の先生」には習
い事・芸事の先生や、上司、先輩、親族、著作を通じて影響を受けた人物、学校を卒業
した後に出会った学校の先生などが含まれる。
- ⁹ここでは、「会社経営者」「芸術・芸能職」「専門職」「文筆業」「政治家」「官僚」の5つ
の職業カテゴリーについて、それぞれ著者と同じカテゴリーに属する「先生」を「同職」、
別のカテゴリーに属する「先生」を「他職」とした。
- ¹⁰本論文では、「財界人」カテゴリーとして「会社経営者」を、「文化人」カテゴリーとし
て「専門職、芸術・芸能職」を用いている。
- ¹¹「同一職」「近接職」の分類は、次のような基準で行なっている。「同一職」は著者と全
く同じ職業の先生である。「近接職」は著者と同じ分野かつ同じ伝統／近代部門の職業
の先生、または著者の分野に関連する研究者や評論家である。
- ¹²この分類のしかたは、鳥羽欽一郎（1987）の「企業家・経営者」の分類にしたがってい
る。
- ¹³各大学出身の会社経営者のケース数は次のとおりである。東大81、京大17、一橋大18、
慶応大23、早稲田大5。

（稲垣恭子 教育社会学講座 教授）

（濱貴子 教育社会学講座 博士後期課程3回生）

（受稿2012年9月3日、受理2012年10月31日）

Mentor-Student Relationships Among Intellectuals and Financiers: Analyzing “*Watashi no Rirekisho*”

INAGAKI Kyoko and HAMA Takako

In this paper, we will analyze the question, how do famous people from various professional worlds describe their memories of “teacher (mentor),” mostly in quantifiable terms. This paper adds to our knowledge by analyzing the results of a long-running monthly column in the *Nikkei Shimbun* entitled “My Resume (*Watashi no Rirekisho*),” which highlights differences according to one’s occupation. When we consider this question for professions as a whole, our results can be divided into four categories: 1) a group in which most people describe deep and profound memories of their teachers (specialized professions), 2) a group in which most describe deep memories of only a few particular teachers (arts, entertainment and literary professions), 3) a group in which a large number of teachers are described but the descriptions are short and their depth is thin (bureaucrats), 4) and a group in which both the number of teachers described and the types of descriptions offered are few (company managers and politicians). This paper considers the details of these four professional categories to clarify the distinct characteristics of these types of people. The results indicated that the meaning of “teacher (mentor)” and the social status afforded to them differed depending on one’s profession.